南方（比島）

フィリピン
「ネグロス島残置隊」戦記（その一）

北海道　猪股義博

明野忠魂塔慰霊祭

平成十二（二〇〇〇）年十一月二日、「陸上自衛隊航空学校」のある三重県度会郡小俣町明野の空はさわやかに晴れ上がっていました。ここはかつての明野陸軍飛行学校の跡地です。飛行学校の開校は遠く遡って大正十三（一九二四）年ですが、いわば陸軍戦闘機操縦者養成のメッカともいわれ、後には各地に分校、分教所も設けて、有名な加藤隼戦闘隊長をはじめ多くの優秀な戦闘機操縦者を生みだしました。

昭和十九（一九四四）年六月には明野教導飛行師団として改編され、その後も操縦者はもちろん整備、通信などを含めた大量の関連部隊を内外地各戦線に派遣し、多くの戦没者を出した歴史的な飛行基地でもありました。

昭和十七年十二月に飛行場の一部に建立された「明野陸軍飛行学校・忠魂塔」前では、ここを原隊とした多くの戦没者の慰霊のため、戦後も毎年慰霊祭が開催されてきました。その日、私は北海道からただ一人の関係者として参加したのです。

実に六年ぶりの参加でしたが、式場に一歩足を踏み入れた私には、一瞬、言葉にならない激しい感動が胸

を打ちました。
当日は自衛隊機の一切の訓練は中止され、静寂そのものの飛行場にはかつての部隊出身者や遺族、自衛隊関係者などが多く参列し、荘厳な雰囲気のなかで慰霊祭式典は始まりました。
半旗黙祷、自衛隊儀杖隊の弔銃、礼砲と進み、軍楽隊の厳かな礼楽のなか追悼の辞や各飛行隊長、ご遺族、関係者全員の献花と参拝が始まる頃から、私にはあのフィリピン戦線での凄惨苛烈な幾多の光景が瞼に浮かんで涙が止めどなく流れ落ちました。
ハンカチを目に当てながら唇を噛み締め、心から戦死者の冥福を祈りつつ白菊を献花したのです。
式典は最後には『加藤隼戦闘隊歌』と『同期の桜』が演奏され、「忠魂塔の管理は自衛隊が護り継ぐ！」という力強い閉会の言葉に安堵しながら、関係者との懇親会場に移動いたしました。
なつかしい顔、肩を組み合う仲間、お互いに歓談は尽きるところがありません。私はこの慰霊祭には、遠隔地のため毎年の参拝はできませんでしたが、その数年間にも共に戦った顔見知りの仲間は減り、逆に身内の方の消息を求めるご遺族が多数参加しておられました。
会食のとき私の隣席におられた女性は、ルソン島アリタオで戦死した城戸氏保君（特幹）の姉の娘で、九州の福岡から遠路参加したとのことで、時間は刻々と流れ去っていることを痛感致しました。
あの厳しい戦闘に生き延び、そして戦友の御霊追悼に今年もまたこの慰霊祭に参加できた感激を私はしみじみと胸に刻みこんだのです。
なお、忠魂塔に付随して、「顕彰之誌」と「奉賛会記念碑」が昭和五十一年十月に設置されました。

入隊、戦場、そして戦後

太平洋戦争が刻々と熾烈化するにつれ、全国の中等学校も軍事一色に塗り変えられ、軍による青少年への期待は日増しに高まっていた昭和十八年十二月、陸軍航空特別幹部候補生（通称・特幹）の制度が発足しました。

旧制余市中学校四年生在学中だった私は、祖国危急存亡の今、国家の要請に応ずることこそ若人の使命と単純に信じ込み、多くの同期生と共に早速志願書を提出し、昭和十九年二月に無事試験に合格しました。思えば数え年十七歳の冬でした。

入隊は昭和十九年四月二十日、特幹一期生として現在の千葉県柏市に設置されていた第四航空教育隊第四中隊（戦闘機電気整備）に配属されました。

ここでは、軍人としての基本訓練や、飛行機の電気系統技術の習得に向けての厳しい短期教育の日々が続きましたが、第一期の検閲を終えた八月初旬、戦闘機操縦教育の総本山として知られる明野陸軍飛行学校本校の整備隊に転属を命ぜられ、十数人の仲間と共に赴任いたしました。

この時、私たちの他に第三航空教育隊（機関・武装・爆装）と第七航空教育隊（計器）からも特幹数十人が同じ整備隊に合流しました。

飛行学校では陸軍が誇る最新鋭機の四式戦闘機（疾風）の実習教育に関わり、明日の戦果を夢見て励む、充実感にあふれた意気壮んな日々でした。

九月に入って、柏市の第四航空教育隊から共に明野に配属されて来た数人の戦友は、三重県亀山の「明野飛行学校北伊勢分教所」に一式戦闘機（隼）要員として派遣されて行きました。実はこれが、日頃から最も親愛する戦友の高橋忠臣君との初めての別れであり、戦後四十年を経ての運命的な再会になるのです。

本校に残った私たち四式戦（疾風）要員は、この年の十月、明野教導飛行師団第三十飛行集団に所属編成された「飛行第二〇〇戦隊」の整備要員として、正に風雲急を告げるフィリピン諸島に派遣され、最前線で悪戦苦闘の末、部隊の大半を失いました。

第四航空教育隊以来の同期生八人と共に、フィリピンに派遣された私はただ一人、幸いにも過酷な戦場に生き残って捕虜となり、昭和二十年十二月、フィリピンのレイテ島タクロバン収容所からアメリカの輸送船で浦賀港に上陸し帰国しました。

復員後は悲惨な戦場生活の影響で健康を著しく害

し、また戦後の混乱と食糧難のため、どん底の生活に追われて精神的な余裕もないままに、一方では凄惨な戦争の悪夢を引きずりながら、ただただ生きるための精いっぱいの日々でした。

もちろん、あの戦争体験を静かに振り返ろうとする思いの一片もなく、むしろあの戦争に関わるすべての記憶を、懸命に忘却の彼方に追いやろうとする葛藤の日々でもあったと言えるでしょう。

帰国後の二、三年の間は、夜ごとに悪夢にうなされ、時には絞るような叫び声をあげて自分で驚いて目覚めたり、寝汗でびっしょりになっていることもありました。マラリアも数回発症したものです。

しかし、あれから数十年という時間の経過につれて、いつしかなつかしい戦友たちの存在が気になり、その手蔓を求めていろいろと情報を探った末に、ふとした機会から「飛行第二〇〇戦隊」の元軍属の方と連絡がとれました。

そして「飛行第二〇〇戦隊」が編成された元明野陸軍飛行学校の校庭にあった忠魂塔前で、毎年《慰霊祭並びに追悼式》が挙行されている事を知り、平成五年に初めて参列したところ、三人の生還戦友と会う事ができたのです。

遠い昔を辿りながら歓談は尽きる所を知らず、ただただ生きている喜びを確かめあう感激の一日でした。その後本日まで、幾人かの第二〇〇戦隊生還者と交流した結果、いくつかの貴重な資料を得たうえ、おぼろげながら様々な記憶が蘇って来ました。

時間的には短い期間ではありましたが、実に筆舌に尽くし難い凄惨な地獄の世界を彷徨する、正に生死が紙一重だったあの日々は、何年間にも匹敵するような重苦しい時間の流れでもありました。

そんな強烈なわだかまりがやがて、「フィリピン・ネグロス島残置隊」の実体験を中心に、特に航空前線では最後の少年兵であった、私たち特別幹部候補生の鮮烈な生き様を記録し、いわばあの戦争の語り部として次世代の子供たちに残したいと願うようになり、たどたどしいながらも原稿用紙を埋める作業を始めました。

なお、「飛行第二〇〇戦隊」の残置隊はルソン島北部とネグロス島に分かれますが、本稿では私が直接体験した「ネグロス島残置隊」の行動を中心にまとめました。

飛行第二〇〇戦隊の概要

編成日　昭和十九年十月十二日
担　当　明野教導飛行師団（明野陸軍飛行学校）
所　属　第三十戦闘飛行集団
機　種　四式戦闘機〈キ84〉疾風（はやて）
機　数　八十機
戦隊長　高橋　武中佐

アジア太平洋戦争も昭和十九年中頃に至って米軍の反撃は一段と激しく、マリアナ諸島を奪回した勢いにのって、ついにフィリピンへの米軍反撃が時間の問題となってきました。

日本軍部は太平洋の重要な生命線でもあるフィリピンを死守するため、昭和十九年秋、急遽、明野教導飛行師団に大命を発して「飛行第二〇〇戦隊」を編成し、フィリピンのレイテ島作戦に派遣しました。

本隊は第四航空軍司令官の富永恭次中将が、戦隊の活躍に期待をかけて、通称「皇（すめら）戦隊」と命名したこともあり、明野教導飛行師団最精鋭の航空戦闘集団として期待を集め、陸軍の最新鋭機でもある四式戦（疾風）が優先的に供給されました。

しかし現実には、若干の幹部を除いて実戦経験者は少なく、明野の操縦教育過程を終えたばかりの航空士官学校第五十七期生や、少年飛行兵第十三期生の実戦経験のない操縦者が多数含まれていました。ただ、その大半は成績優秀ないわゆる「恩賜組」の若く凛々しいパイロットたちばかりでもありました。

戦隊は当初、ルソン島とネグロス島に基地を展開し、主としてレイテ湾の制空、迎撃、援護を中心に活動して、いくつかの戦果を上げて「感状」を拝受する戦績がありました。しかし、連日連夜の出撃や敵機来襲による飛行機の損害が続出し、荒れ果てた滑走路での事故機も多く、持機は次第に消耗を重ねて戦勢我に

利なく、飛行第二〇〇戦隊の活躍は必ずしも期待に添うる事なく、多くの将兵を南海に散華させたことは真に痛恨の極みであります。

十二月に入ると、米軍の攻撃はますます激しくなり、ネグロス島サラビヤ基地からの出撃は無理と判断し、戦隊はルソン島に後退して出撃を続けましたが、遂に昭和二十年一月九日に、米軍は大挙してルソン島のリンガエン湾に上陸して来ました。

戦隊は、残存機で米艦船に肉薄攻撃を続け、遂に一月十三日の突入を最後に手持ち機は皆無となり、北部ルソン島のエチアゲに後退しました。

さらに生存操縦者と若干の整備員は台湾に脱出し、次いで内地に戻って戦力回復を待ちましたが、態勢が整わないままに飛行第二〇〇戦隊は昭和二十年五月三十日で解散となり、操縦者は「明野飛行部隊」他各戦闘隊に配属されました。

一方、フィリピンで翼を失った飛行第二〇〇戦隊の整備隊員は、ルソン島とネグロス島にそれぞれ残置隊として残され、臨時歩兵部隊に編成されて地上戦闘に従事して山中のゲリラ戦に参加しましたが、大半は草むす屍となり、またどこで戦没されたのか分からないまま、戦死地が遺族にも知らされていないケースが少なくありません。

また残置隊そのものの戦闘状況や行動の正規の記録もなく、十分な資料が整備されないまま、今にいたっています。ただ、現在までに残された個人的な記録としては、元軍属の堀井光治さんが書かれた『飛行二〇〇戦隊史（昭和五十四年発行）』、井上幸男さん（少飛十四期）の、『遠い記憶と悠久の平和』などの記録があります。

また、望月和雄さん（少飛十四期・機上通信／ルソン島アリタオで戦死）の弟の仲野英夫さん等三人の共同記録『二〇〇戦隊（比島）慨史』もあります。

仲野英夫さんは平成七年五月、同九年十一月及び平成十二年二月の三回にわたり、フィリピンと関係の深いルソン島およびネグロス島で現地調査や資料蒐集、戦没者の供養も実現されました。

明野忠魂塔慰霊祭では、ご遺族の方々に現地の状況などを、熱心に説明しておられましたが、その誠実さと実行力に本当に頭の下がる思いです。

フィリピン・ネグロス島残置隊

昭和十九年八月、各航空教育隊から明野陸軍飛行学校本校整備隊に配属された私たち特別幹部候生は、最新鋭機である四式戦の難解な機能の整備習得に猛勉強を強いられましたが、たまたま十月十二日、第三十戦闘飛行集団隷下「飛行第二〇〇戦隊整備隊」に編入され、正に風雲急を告げるフィリピンに派遣される事になりました。

整備特幹同期生は約九十二人、うち私たちの第四航空教育隊から一緒だった戦友は約八人と記憶しています。私は「整備第二中隊」に配属されました。

翌十月十三日、戦隊は出陣式を挙行しました。いよいよ戦場だ、と思うといやが上にも身の引き締まる激しい緊張感が渦巻きました。

不思議にも故国を離れて死地に赴くという感傷や悲壮感、そして戦線への恐怖感もなかったように思います。それだけに思考は幼く、すでに軍人精神教育によって洗脳されきっていたのでしょう。

十月十六日、司令部付要員は逐次出発し、整備隊は二十三日にフィリピンに向けて全員空輸出発と決定しましたが、私たち十五人は命令により先遣隊として直ちに九州に向けて出発し、南九州の新田原飛行場からはMC20型輸送機で台湾中部の嘉義飛行場に飛んで給油を受け、翌日同機でルソン島のクラーク基地に到着しました。

直ちにクラーク飛行場群（十一カ所）の南、約十五キロのポーラック飛行場に移動して、後続の本隊戦闘機群の到着を待ちました。

そこでは到着機の整備や攻撃機の移動に加え、さらには当時本部があったネグロス島のサラビア飛行場への移動転進のため、暫時の睡眠時間もとれず疲労困憊の日々が続きました。

ポーラック飛行場到着数日後には、早くも米軍グラマン戦闘機に発見されて機銃掃射を受け、整備中の一

機がガソリンに引火炎上しました。私にとっては初めての体験で、ただじっと地面に身を伏せる他ありませんでした。頭上から薬莢がバラバラと落下し、頭の中がグラグラしたことを思い出します。

その頃、岩瀬武信君（特幹）が病気に罹って二日ほど寝込みましたが、特に苦しんだ様子もなく、朝になって誰も気付かないままに死んでいました。整備隊員としての最初の戦病死として茶毘に付して弔いました。

その頃の夕食は、機体整備後になるため毎日が暗闇の中での食事になり、果たしてどんな惣菜なのか形も内容もはっきりせず、味気もないただ空腹を満たすだけのものでした。

十月二十七日からは重爆撃機に随時機材を積み、弾穴したサラビア飛行場の滑走路にガタガタと着陸を繰り返しながら、月末までに何とか本部への移転任務を完了することができました。

整備第一中隊は主としてサラビア基地の勤務を続けましたが一部の者は命により、十一月二日、サラビア基地より南西にあったタンザ飛行場に移転しました。

しかし、十六日飛行場を敵機に発見されて機銃掃射を浴び、多くの戦死者や負傷者をだしました。

一方、私たち第二中隊の主力は十二月六日、ネグロス島北部のマナプラ基地に派遣されましたが、ここでも敵機「グラマン」や「コンソリーデーテッド」（爆撃機）の攻撃を受け、また「P38ロッキード」（双胴の戦闘機）の低空機銃掃射や爆撃にあって飛行場が使用不能になり、同月十五日、サラビア基地の本隊に復帰することになりました。

その間、敵機来襲の合間を見ての戦隊機の整備、迎撃出発の見送り、次の出撃準備と寸暇もない行動で疲労は極限に達し、ただただ気力だけが支えの基地生活でした。因みに、第二中隊整備員のうち電気担当は七人で特幹出身は私一人だけでした。

その頃、操縦者宿舎の祭壇に黒いリボンの遺影が増え、つい先日までの気概にあふれた彼らの笑顔を思い出すと感無量でもありましたが、記録によると、この一カ月間で飛行機の損害は自爆未帰還十九機、地上大

破、中破、炎上など三十五機となっています。

(註) 飛行機の損害の規模について
敵機は再三にわたって飛行場付近に三機ほどの編隊で超低空の往復偵察を繰り返し、椰子の枝葉や樹木で偽装している飛行機を目視や写真撮影などで発見し、整備中や出撃待機中の我が方の飛行機に銃撃を加えてきます。

その損害の程度で「地上大破」「中、小破」「炎上」などと言います。ともかく上空には常時米軍機が警戒していて、制空権は殆ど彼らの手中にあり、私たちはほんのわずかの間隙を狙って行動する他なかったのです。

十二月十五日、ついに米軍はミンドロ島サンホセに上陸したため、我が軍のルソン島とネグロス島との補給路が完全に分断されました。

そして十二月二十一日、タンザ飛行場より第二〇〇戦隊最後の攻撃機が出撃しましたが戦力及ばず、隊長以下の本部員と空中勤務者らはルソン島に転進して再起を期し、整備隊は隊付の長沢中尉以下百五十六人が残置され、第七十一戦隊長の指揮下に入ってゲリラ討伐や飛行場警備の任に当たることになりました。

なおこれまでに、第十四方面軍司令官の山下奉文大将は、フィリピン航空作戦に最新鋭機の四式戦闘機隊九個戦隊を相次いで投入しましたが、圧倒的に優勢な米軍の前にそのほとんどが全滅に近い打撃を受けつつあることを認めざるを得ませんでした。

方面軍はついにレイテ決戦を決意し、「捷一号作戦」を発動して戦艦「大和」を中心とした連合艦隊が総力をあげてレイテ湾に突入しました。この作戦を契機に「神風特攻隊」が出現し「必死必中」の体当たりを敢行したのです。

しかし、本作戦も我に利あらずの結末となり、やがて本土への直接攻撃は避けられないと判断した上層部は、その抑制策としての戦術の転換を図り、持久戦構想によってフィリピン駐留のすべての兵員を、戦力の劣勢を承知しながらも地上戦に投入させ、結果的に膨

大な戦死者を出しました。
　後日判明したことですが、直接の指揮命令を発する第四航空軍司令官のT中将は昭和二十年一月、幕僚二人を従えてルソン島ツゲガラオ基地から九九式襲撃機(軍偵)で台湾に脱出しました。
　四機の戦闘機が司令官の援護に当たりましたが、途中、敵機の妨害を避けてバシー海峡を一気に越え、台湾の台中飛行場に着陸しました。司令官はこの援護の四人に対してその労を労い、固い握手をしながら喜んでくれましたが、その時の涙をみせた姿はむしろ哀れにも見え、これがかつての勇将かと思わず顔を背けたと操縦者のK曹長(少飛六期)は、その手記で語っています。
　特攻隊の出撃にあたっては「諸君は先に行ってくれ。私は最後の一機で諸君の後を追う」と、隊員たちに訓示していながら、戦況が不利になると、多くの部下を残して自らはすかさず本土へ逃げ帰った司令官や参謀たちの行為は、明らかに欺瞞であり無責任極まりないと指弾されるべきでしょう。
　なお、厚生省資料によると、このレイテ作戦では陸海軍の七万九千五百人が戦死したと記録されています。
　本部転進に伴い、米軍上陸に備えて地上部隊(弓削部隊傘下)に配属された私たちネグロス島残置隊は、連日、地上戦闘訓練を繰り返し、シライ地区の山麓陣地の通称「荒神山」への資料搬入や陣地構築、戦車構の掘削、コの字型横穴掘り等をして米軍上陸に備えました。
　三月上旬、いよいよシライ沖合いの遠くから米軍の艦砲射撃が始まり、海岸線を防備していた残置隊員十人の犠牲者が出ました。三月下旬、突如としてシライ沖の海上は艦船で覆い尽くされた感があって、艦砲射撃は間断なくシライの町に砲弾の雨を降らせ、上空には戦闘機、爆撃機が終日昼夜の別なく飛来して、爆撃、機銃掃射を繰り返しました。
　この攻撃で、更に十数人の戦死者を出し、私たち二十人は戦車爆破の肉薄攻撃班に任命されて、全員必死

の覚悟をして任務につきました。
シライでのある日、私はただ一人で対空監視の任務についていましたが、観測機に発見されたのか、私の立哨位置付近に着弾がありましたが、たまたま私は小公園と教会の間に居たため難をのがれました。
当時は目と耳だけで敵機の来襲を判断し、教会の鐘を鳴らして全員に警報を伝えるのですが、実際には殆ど効果がなかったと思われます。
何分にも超低空で来襲する敵機を発見したとしても時すでに遅く、被害はつのるばかりで完全に絶望状態でした。こんな、無為に近い行動が朝から日没まで五、六日も繰り返されましたが、ついに全部隊が後退を余儀なくされました。
その頃シライの町には既に食糧がなく、敵上陸に備えてダイナマイト火焔瓶の配布も受けましたが、三月二十九日、米軍は遂にシライ東方三十キロの地点に上陸したのです。
米軍は戦車を先頭に北上し、正午頃にはシライの町外れまで侵入しましたが、先に我が軍が侵入に備えて事前に爆破していた橋梁前で一旦止まりました。
しかし四月二日、米軍はついにシライ飛行場に侵入してきました。決死の交戦をしましたが迫撃砲、戦車砲の一斉攻撃を浴び、遂に陣地撤収の止む無き状態になり、命令によって四月三日未明、シライの市街を抜け、山麓まで十五キロの両岸切り立つ河川の中を、時には腰以上の水に漬かりながら撤退せざるを得なくなりました。
撤退途中で夜が明けました。
やがて平坦な樹林で敵機に発見され、グラマンの機銃掃射を受けて、塩田、森の少年飛行兵ほか十数人死傷者が出ました。この時、私の右隣にいた塩田兵長(少飛十五期)は、頭部に銃弾を受けて即死しました。見るも無残な最期でした。
また、山麓の陣地は空気が悪く、湿気による関節痛に悩まされる者が多く、この間、米軍の進撃は予想外に早く、進路に構築した戦車壕等の障害物は大型ブルドーザーでたちまち排除し、戦車を先頭に山麓台地に進出して、間断ない戦車砲撃やナパーム弾でジャング

ルは焼け野原と化し、死傷者が続出しました。
一方我が軍は、斬込隊を三、四人単位で編成して斬り込みましたが、四月二十六日、斬り込み作戦打ち合わせのため大隊本部に集合したとき、敵の迫撃砲の集中攻撃にあって武内少佐外数人が戦死しました。戦友の江口兵長（少飛）、丸山兵長（特幹）も戦死しました。

我が残置隊は、全力で通称「三軒屋」付近に斬り込みました。「斬込隊」は、昼は林や藪の中に潜み、地形や敵陣を偵察して真夜中に行動しますが、まず敵陣や幕舎に近づき一斉射撃や手榴弾を投げ込みます。当初はそれなりの戦果もありましたがしかし、敵の警戒も次第に厳重になり、陣地周辺に鉄線を張り、線に触れた途端に機関銃が火を吹いて犠牲となった戦友も数多く、当方の犠牲の割にその効果も薄れてゆきました。

肉薄斬込隊には我が隊の十数人参加し、私もその一員に選ばれました。手榴弾二発、三八式歩兵銃と帯剣だけの装備です。もしや、これが最後の戦闘かと思うと、武者震いというか微妙に身の引き締まる緊張感が襲ってきました。

敵陣に向けて、全員が言葉もなく黙々とジャングルを進みましたが、途中まで来て急に斬り込みの中止命令が出ました。理由はわかりませんが、ここでまた私は生き延びる幸運に恵まれたのです。

当時の部隊の状況からは、戦闘と退却の繰り返しで戦意を喪失したものも多く、また、傲慢で自己中心的な上官に対する反感も露出し始ていましたし、ともかく、もはや斬り込み作戦の効果はなかったのです。

【解　説】

飛行第二〇〇戦隊整備隊

フィリピン「ネグロス島残置隊」

当団体、香川県連事務局長は、飛行第二〇〇戦隊整備第一中隊所属であり「遠い記憶と悠久の平和」と題した、体験記録を作成してある（香川県大川郡志度町鴨部）。解説として同記録より抜粋記録した。

編成

《昭和十九年十月十二日》

軍令　陸甲第一三六号及び陸亜機密第五九四号に基づき、第三十戦闘飛行集団司令部及び飛行第二〇〇戦隊の編成を当教導飛行師団に下令翌十三日完結す。

出陣式

《昭和十九年十月十三日》

第三十戦闘飛行集団及び飛行第二〇〇戦隊の出陣式を挙行し、空軍司令官陸軍中将菅原道太閣下の訓示受く。

所属

《二〇〇戦隊　整備第一中隊》

昭和十九年十月二十三日　明野離陸—新田原経由

同　　二十四日　台湾　嘉義井

同　　二十五日　比島　ポラック井

同　　二十七日　ネグロス島　サラビヤ井

昭和十九年十二月二十一日、夕刻、最後の攻撃機を見送る。

昭和二十年一月元日　本部がルソン島に転出、残置隊は地上戦の訓練となり、シライ地区の陣地展開を命ぜらる。

一月上旬　サラビヤよりシライへ移動、陣地構築。

私は、操縦者の入野曹長の看護当番　シライ陸軍病院（空中戦において負傷）。

二月上旬　敵上陸近しとの事で中隊復帰、命により戦車攻撃隊へ。シライ町はずれ陣地構築。地雷攻撃（肉薄攻撃）。

この頃シライ沖より艦砲射撃始まる。海岸防備班十人位戦死。

二月二十日頃　工兵隊　橋梁爆破。

高射砲隊　戦車攻撃　戦果あり。

戦車攻撃隊　復帰命令

中隊追従　三軒屋着。

病人先発　敵機の飛行激し。

ギンパラオン高地付近にて敵機の機銃掃射　二人戦死、負傷者あり。病人負傷者後発

三月下旬　食糧受領に銀波構へ、背中へ夜光虫をつけて真っ暗闇の行軍で、必死の思いで弾薬、食糧を持ち帰る。肉薄攻撃班員となり全員必死を覚悟して任務に就く。

四月二日　シライ井場に米軍が突入してきた。迫撃砲、戦車砲の集中砲火を浴びるが、全員必死で陣地を死守せり。夜半、陣地撤収の命あり。軍事施設、橋梁爆破、町の大火災の中を山麓までの一五キロ程を強行軍であった。

夜が明けて、遮蔽物のない山道で敵機に発見され、機銃掃射を浴びせられ、塩田・森両兵長が戦死、負傷十数人が出た。命令された地点に夜中に着き、陣地構築する。

また、石腸台において戦車構の構築、荒神山に転進、陣地構築、横穴掘り、しかもコの字形に構築。此の間、迫撃砲の間断なき攻撃を受ける。敵機によるナパーム弾でジャングルが焼け野原の如くなる。食糧不足で日ばかりが大きくなる。

四月・五月と敵の攻撃・爆撃により、さすがのジャングルも赤肌の地肌がむき出して、敵の哨戒機が低空で一日中飛び回る。

天長節切り込み打合せに大隊本部へ行った、丸山、江口君らが迫撃砲で戦死する。

二十九日は長沢隊主力で敵陣地へ切り込み攻撃。これより、風間曹長班の切り込み、神野曹長班の切り込みと行きて帰らぬ、悲惨な戦いとなる。

六月下旬までに筆舌につくせぬ苦闘の連続となる。中でも、中第一線陣地では、六月十三・十四・十五と三日間、迫撃砲の集中砲火で十五、六人戦死。同期坂田君は直撃弾で戦死せり。

六月下旬　転進の命により、中隊長中心に団結した行動の許、シライ山東方に転進せる。自活の道を歩むが、常に分哨警備につく。

七月十一日　第一分哨　ゲリラ攻撃により全員戦死。